様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　7 日現在

機関番号：２４２０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2012
課題番号：２０５９２５９４
研究課題名（和文）発達障害児の地域社会で自立・自律生活できる能力を育てる
看護支援システムの開発
研究課題名（英文）Development of a Nursing Support System for Autonomy & Independence of Children with Developmental disorder in the community

研究代表者
大脇　万起子（OHWAKI MAKIKO）
滋賀県立大学　人間看護学部　准教授
研究者番号：00280008

研究成果の概要（和文）：
１．生涯型看護支援プログラムの開発：発達障害児が将来、自立・自律生活を営むための研修内容を構築した。 最終年度は、調理に特化し、記録用紙とマニュアルを作成した。
２．看護師研修プログラムの開発：看護支援の目的・方法などに関する研修資料と指導計画を作成した。（具体的な支援内容、注意事項の説明　など）
３．研修用ITプログラムの開発：上記の資料をホームページ(HP)に掲載して、ダウンロードして利用できるようにした。不当アクセスの防止のため、パスワード管理も準備した。

研究成果の概要（英文）：
1. Development of the nursing support program for children with developmental disorder in the community for their life: the training program and the form for evaluation and observation. In the fiscal year, it specialized in cooking.
2. Development of the nurse training program: use of the training program and the form for evaluation, notes in the management etc.
3. Development of the IT program for training: the download system for the various material of the nursing support program, the password management was prepared for the prevention of an unjustified access.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：発達障害児・自律/自立生活・地域社会・看護支援システム・IT プログラム

１．研究開始当初の背景

本研究では発達障害児の将来を見据えた生活自立・自律のための生涯型看護支援を検討するが、国外では、高齢者や終末期患者を対象としたQOLを重視したALFでの看護支援の報告(Weech-Maldonado R,2007；Cartwright J,2003)があったが、障害児・者に対する報告は認められなかった。教育・福祉領域ではTEACCHプログラム（Schopler E:1996)があり、日本でもこのプログラムの施行者を養成する大学があるが、他のプログラムも含め、看護領域での発達障害児・者の健康維持・増進対策も含む系統的な取り組みは文献上ではなかった。

２．研究の目的

本研究は、発達障害児がもつ未開の能力を開発し、将来、健康で幸福な自立・自律生活を地域社会で営むことができる看護支援システムの開発を目的とする。具体的には以下の通りであった。

(1)発達障害児が将来、自立・自律生活を営むための生涯型看護支援プログラムを開発する。

(2)生涯型看護支援プログラムを提供する看護師を養成する看護師研修プログラムを開発する。

(3)(1)および(2)のプログラムを補佐し、普及させるためのITプログラムを開発する。

３．研究の方法

(1) 2008 年度

初年度であり、下記のような看護支援システムの開発に不可欠なインフラ整備を行った。

①生涯型看護支援プログラムに用いる評価尺度の開発準備としての実態調査

評価尺度の項目作成のため、障害児施設等への聞き取り調査および厚生労働省の障害程度区分認定の概況調査票・認定調査票を検討して調査紙を作成し、中学３年生から高校３年生までの知的障害児の保護者を対象としたこの質問紙を全国特別支援学校知的障害教育校ＰＴＡ連合会に所属する 47 都道府県の学校に配布した。

②支援用ITプログラムの準備・開発（2012年度まで継続）

(2) 2009 年度

2 年目であり、下記のような看護支援内容の開発を行った。

①2008 年度の調査に基づく生涯型看護支援プログラム試作

前年度から継続実施していた知的障害をもつ高校生の保護者を対象とした質問紙調査は配布数 5583 通、回収数 523 件（回収率 9.4%）を得て数量化可能な部分について統計分析を行った。また、追加調査協力の内諾を得られた回答者 48 名を対象とし、紙面調査の補足のためのメールによる聞き取り調査を依頼し、14 名（回収率 29.2%）の協力を得た。

それらに基づき、看護専門職が判断した対象者ニーズだけでなく、保護者が共通してもつ対象者の自律・自立に関する価値観の把握を行い、保護者がプログラムに意欲的に取り組むために必要な要素の把握も行った。

②支援用ITプログラムの準備・開発

(3) 2010 年度～2012 年度

①看護師研修プログラムの開発

生涯型看護支援プログラムを活用した実践を行い、その観察記録・実践協力した看護師からの聞き取り調査により、プログラム内

容を検討した。

②支援用ITプログラムの準備・開発

４．研究成果

(1) 2008 年度

①生涯型看護支援プログラムに用いる評価尺度の開発準備としての実態調査の結果

全国特別支援学校知的障害教育校ＰＴＡ連合会に所属する 47 都道府県の学校に配布し、539 件の有効回答を得た。

回答者の属性 N=539

		n	%
性別 n=513	男	62	12.1
	女	451	87.9
年齢 n=451	30代	23	5.1
	40代	323	71.6
	50代	96	21.3
	60代	7	1.6
	70代	2	0.4
児との続柄 n=510	母	442	86.7
	父	58	11.4
	祖母	4	0.8
	祖父	3	0.6
	その他	3	0.6

分析対象児の概要 1 N=538

		n	%
性別 n=513	男	374	69.9
	女	161	30.1
学年 n=531	中学1年生	2	0.4
	中学2年生	2	0.4
	中学3年生	153	28.8
	高校1年生	212	39.9
	高校2年生	149	28.1
	高校3年生	11	2.1
	その他	2	0.4

分析対象児の概要 2 N=538

		n	%
療育手帳の等級 n=486	中度・軽度	271	56.0
	重度・最重度	214	44.0
推察した発達年齢（歳） n=315	0歳	6	1.9
	1～2歳	56	17.8
	3～5歳	97	30.8
	6～9歳	82	26.0
	10～11歳	51	16.2
	12～14歳	23	7.3
障がい名分類 n=474	広汎性発達障害	206	43.5
	知的障害	172	36.3
	ダウン症候群	51	10.8
	てんかん	17	3.6
	学習障害	4	0.8
	ADHD	4	0.8
	その他	20	4.2

障がい名分類とアセスメント項目

	広汎性発達障害	知的障害	ダウン症候群
友達と仲良くすること	○	△	△
友達を上手に作ること	○	△	
学校 地域 家庭でのマナーを守る(総合)	○	△	
ゴミの分別(生活マナー)		△	○
ゴミ出しの場所や日時を守ること(生活マナー)		△	○
社 突然大声 奇声を出したりしない(対人マナー)	○	△	△
会 突然暴力をふるったりしない(対人マナー)	○		△
性 他のひとの物と自分の物の区別(対人マナー)	○	△	
叩いたり蹴ったり器物を壊したりしない(対人マナー)	○	△	
髪型などを整えられる(身ぎれいさ)	○		△
他の人に配慮した行動(総合)	○	△	
自分の出す音への配慮(他人への配慮)	○	△	
他の人との行動の折り合い(他人への配慮)	○	△	
規則正しいリズムでの生活	○	△	
水の温度の調節(洗面)	○	△	
水量の調整(洗面)	○	△	
基 爪切り(整容)			○
本 整髪(整容)	○	△	
的 適切な場所での衣服の着脱(入浴)	○	△	
生 更衣(総合)		○	
活 上着の着脱(更衣)		○	
習 ズボンやスカートなどのファスナーを開められる(更衣)	△	○	
慣 栄養(総合)	○		
食事の時間 しっかり食べること(栄養)	○		△
色々な物を バランス良く食べること(栄養)	○		
洋式トイレや和式トイレの適切な使用(排泄)			△

χ^2検定結果、『できる』児が有意に少ない○、多い△

障がい名分類とアセスメント項目 2

	広汎性発達障害	知的障害	ダウン症候群
友達と仲良くすること	○	△	△
友達を上手に作ること	○	△	
学校 地域 家庭でのマナーを守る(総合)	○	△	
ゴミの分別(生活マナー)		△	○
ゴミ出しの場所や日時を守ること(生活マナー)		△	○
社 突然大声 奇声を出したりしない(対人マナー)	○	△	△
会 突然暴力をふるったりしない(対人マナー)	○		△
性 他のひとの物と自分の物の区別(対人マナー)	○	△	
叩いたり蹴ったり器物を壊したりしない(対人マナー)	○	△	
髪型などを整えられる(身ぎれいさ)	○		△
他の人に配慮した行動(総合)	○	△	
自分の出す音への配慮(他人への配慮)	○	△	
他の人との行動の折り合い(他人への配慮)	○	△	

χ^2検定結果、『できる』児が有意に少ない○、多い△

上記の表に対象者の概要と傾向を示した。

②支援用ITプログラムの準備・開発の結果

過去の研究成果の掲載と実践普及のため、専用HP（http://uribownokai.org）を立ち上げた。具体的には、過去に開発したプログラムを利用した看護実践の紹介、研究成果によるソフトウェア配信の準備（使用に関する契約書の作成、パスワード管理など）をした。広報は各支援学校へ上記の調査質問紙の発送時に案内を同封したほか、過去の研究協力者（保護者）、地域の公的および民間の福祉機関に対して紙面もしくは口頭により適宜行った。

また、SkypeおよびYahoo Messengerを活用したwebによる遠隔支援・教育の環境準備も行った。

(2) 2009 年度

①2008 年度の調査に基づく生涯型看護支援プログラム試作の結果

看護専門職が判断した対象者ニーズだけでなく、保護者が共通してもつ対象者の自律・自立に関する価値観の把握を行い、保護者がプログラムに意欲的に取り組むために必要な要素の把握も行った。その結果をもとにし、保護者・看護師・その他関係者が共有できる試作アセスメント用紙を作成した。

②支援用ITプログラムの準備・開発の結果

過去の研究成果の掲載と実践普及のために立ち上げたHPの更新を継続して行うほか、システム面では、遠隔支援・教育の準備として、e-learningシステムを整えた。また、webによる遠隔支援・教育の実践準備として、研究者および研究協力者間の会議には必ず、Skypeを使用し、交信のトレーニングも行った。

(3) 2010 年度

①看護師研修プログラムの開発

作成した尺度の使用方法・評価方法に関する研修資料と指導計画の作成:対象者の生活能力に応じて設定した課題を 1～3 個程度含んだ日課を容易に作成できる記録用紙やマニュアルの試作を行った。

② 研修用 IT プログラムの開発

自宅で研修・評価できるソフト(画像、映像、ナレーションの資料)の作成と指導計画の作成:研修看護師用は実用的ではないと判断した一方で、研修者を対象とした視覚教材ではなく、プログラム対象者を対象としたものが有用であると考え方針転換を行った。また、双方向の通信ツールがあれば、安全面にも配慮した有効な支援が行え、対象者の抱える課題にも即時的に対応することができると考えた。

(4) 2011 年度

①看護師研修プログラムの開発

作成した尺度の使用方法・評価方法に関する研修資料と指導計画の作成:対象者の生活能力に応じて設定した課題を 1～3 個程度含んだ日課を容易に作成できる記録用紙やマニュアルの試作を行い、十分に活用できた。

プログラムの効果査定：３年間継続して受け入れた発達障害児１名について、プログラムを終了した。この対象者は学校を卒業した後の就労に問題なく適応しており、家庭においても家族員として機能できるようになっており、地域社会で自立・自律生活できる能力は十分発揮されるようになったと判断でき、本研究での取り組みの効果があったと考えられた。

②研修用 IT プログラムの開発

自宅で研修･評価できるソフト(画像､映像､ナレーションの資料)の作成と指導計画の作成:視覚教材、双方向の通信ツールとも一部試行は終えたが、ＨＰへの掲載および広範囲な関係者の利用は、内容・方法の慎重な吟味の必要性から、次年度の予定となった。

(5) 2012 年度

①看護師研修プログラムの開発

作成した尺度の使用方法・評価方法に関する研修資料と指導計画の作成：最終年度は、調理に特化し、記録用紙とマニュアルを作成した。記録用紙では、対象者の共有課題はリッカート・スケールで評価できるようにし、個々の課題については、看護師の判断で、リッカート・スケール項目の追加か自由記載での評価か選択できるようにした。マニュアルについては、評価表を通したアセスメント・ポイントや指導方法を示した他、看護計画・実践を可能にするレシピ冊子を作成した。

看護支援の目的・方法などに関する研修資料と指導計画の作成：上記の実践時の注意事項の説明、支援内容と支援の流れなどをマニ

ュアルに示した。

研修効果尺度(研修用･実践用)の作成：研修用と上記の実践用尺度を作成した。

看護支援研修者:最終年度は５名で､全員、小児看護臨床経験もあり、臨床経験年数 10 年以上であった。

プログラムの効果査定:上記の資料により、プログラムの意義も各自理解し、それぞれの看護実践ができていた。

看護支援対象者：最終年度は 10 組（本人・母親）であった。調理スキル向上の他、１名は就労支援学校に合格できずにいたが、本プログラムで大型店舗のバックヤード研修を実施後、合格でき、入学後１ヶ月で企業就労ができた。他の対象者は、前年度までの対象者に認められたと同様、家庭での家族員機能を向上させた他、調理プログラムの実施場面で対人能力の向上（調理時他児の調理方法や進行度合いに関心をもつ、各自の料理を交換して試食しあう、など）が認められた。

②研修用 IT プログラムの開発

看護師がプログラムを理解し、実践・評価の方法が自己学習できるマニュアルと評価表の作成：視覚教材として、上記の資料を HP に掲載して、ダウンロードして利用できるようにした。不当アクセスの防止のため、パスワード管理も準備した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①大脇万起子，鈴木育子，鳥居央子，飯田恭子，知的障がい児の家族支援プログラムにおける同胞への支援，家族看護学研究，査読有，15巻3号，2010,2-9

〔学会発表〕（計８件）

①Makiko Ohwaki, Ikuko Suzuki, Takako Miyazaki, Naohiro Hohashi, Support of Children with Mental Retardation and Their Family Using Cooking as a Form of Intervention in Japan, 11th International Family Nursing Conference, June 21, 2013, Hyatt Regency Minneapolis Minneapolis, Minnesota, USA.

②Makiko Ohwaki, Ikuko Suzuki, Yasuko Iida, Takako Miyazaki, Showta Ishikawa, Sayuri Kato, Naohiro Hohashi, Family expectations regarding the independence/autonomy of their children with developmental disorders, 10th International Family Nursing Conference, June 26, 2011, Kyoto International Conference Center, Japan

③Showta Ishikawa, Makiko Ohwaki, Ikuko Suzuki, Yasuko Iida, Takako Miyazaki,Sayuri Kato, Naohiro Hohashi, A review of the effects of nursing support provision through the Travelling Nursing Support Program - To those with developmental disorders and their families - 10th International Family Nursing Conference, June 26, 2011, Kyoto International Conference Center, Japan

④Ikuko Suzuki, Makiko Ohwaki, Yasuko Iida, Takako Miyazaki, Showta Ishikawa, Sayuri Kato, Naohiro Hohashi, Provision of training for nurses working upon the family functions of the families of children with developmental disorders, 10th International Family Nursing Conference, June 26, 2011, Kyoto International Conference Center, Japan

⑤大脇万起子，鈴木育子，宮崎孝子，石川

翔太，加藤さゆり，法橋尚宏，音楽療法による発達障害児の家族への支援,日本家族看護学会第18回 学術集会,2011年6月25日,国立京都国際会館

⑥加藤さゆり，鈴木育子，大脇万起子，宮崎孝子，石川翔太，法橋尚宏，発達障がい児の家族への支援に関する文献検討，日本家族看護学会第18回 学術集会,2011年6月25日，国立京都国際会館

⑦鈴木育子，大脇万起子，加藤さゆり，法橋尚宏，発達障がい児への支援　ー生活能力実態調査からー，第30回日本看護科学学会学術集会，2010年12月3日，札幌市

⑧鈴木育子，大脇万起子，加藤さゆり，法橋尚宏，知的障がい児が利用している社会資源と関連要因の検討，第59回東北公衆衛生学会，2010年7月23日，山形市

〔図書〕（計１件）

①大脇万起子，メヂカルフレンド社，家族システムストレスへの不適応（慢性期）ー障害のある子どもと共に生きる家族のケースー，新しい家族看護学ー理論・実践・研究ー（編著　法橋尚宏），2010，259-274

〔その他〕

ホームページ等

http://uribow.org/

６．研究組織

(1)研究代表者

大脇　万起子（OHWAKI MAKIKO）

滋賀県立大学・人間看護学部・准教授

研究者番号：０ ０２８０００８

(2)研究分担者

法橋　尚宏（HOHASHI NAOHIRO）

神戸大学・大学院保健学研究科・教授

研究者番号：６ ０２５１ ２２９

鈴木　育子（SUZUKI IKUKO）

山形大学・医学部・准教授

研究者番号：２ ０２６１ ７０３

研究分担者

加藤　さゆり（KATO SAYURI）

京都橘大学・看護学部・講師

研究者番号：５ ０３１６ １９７

(2009.4.1.-2011.8.31.)